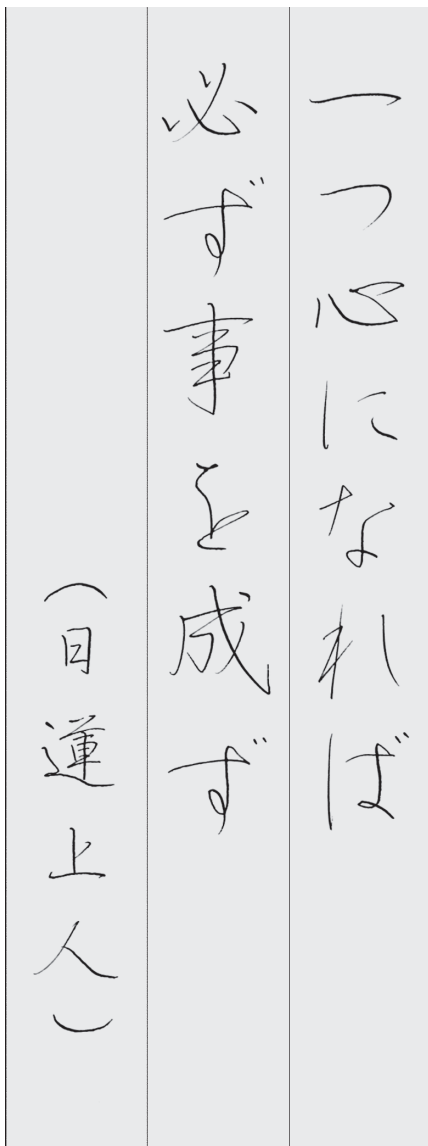


憲照先生の手本ア・ラ・カルト (32)  
(à la carte)

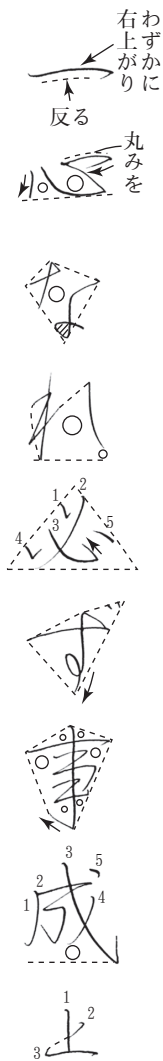
締切り 八月二十四日 (必着)

昭和50年5月



つけペン・墨汁使用

〔解説〕



◎本会は、今年で創立六十八周年を迎えます。まだまだ世の中は、新型コロナ禍の影響で、世界中が不安の中にいます。しかしながら諸先生、会員の皆様の「書」への意欲は消えることなく、時間と共に基本的活動は戻りつつあります。

◎今年の短期特別課題は、昨年同様『原点回帰』をテーマとして、本会の創設者奥村憲照先生の手本を改めて学び直すことにいたします。

お手本は、硬筆、毛筆、一般部、教育部なども合わせれば相当数あります。同一課題を楷・行・草の順で繰り返し、掲載していく予定です。

◎多くの方がかつて憧れた憲照先生の書と向き合うことで、書への情熱を今一度燃え上がらせていただければと思います。

◎創立七〇周年に向けて、力強く歩んで行きましょう。

★一つ：(書体Ⅱ行書)

日蓮上人

鎌倉中期の僧

「百人千人なれども、一つ心なれば必ず事を成す」が全文。

一人の人であっても二つの心があれば、目的とする事の精神が定まらず、あれこれ乱れ、迷いを生じてしまい何事も成就しません。それに対し、たとえ百人・千人の心であっても、目的が一つに定まっていれば何事も成就するのである。

〔作品の出し方〕

▼今回も硬筆部だけに限ります。全員本会段位用紙に書いて下さい。硬筆を習っていない方も、出品は可能です。ご自由にどうぞ。

▼用具は自由ですが、線美を追求のためには、つけペン・墨汁をお薦めします。

▼出品制限の対象とはなりません。

▼事務処理上、支部略称・氏名・会員番号・硬筆規定の成績を、作品余白にお書き下さい。

※不明な点は無記入でも結構です。

▼優秀作品は、写真版として成績表の後ろに掲載しますが、成績表での順位発表はしません。

▼月例作品と同封する場合は、必ず別のビニール袋に分け、表に「月例」「短期特別」と明記して混同しない様にお願いします。

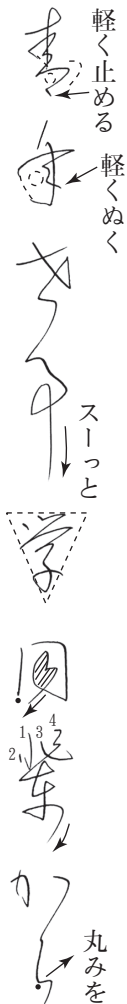
準初段から六段まで

新入から1級まで

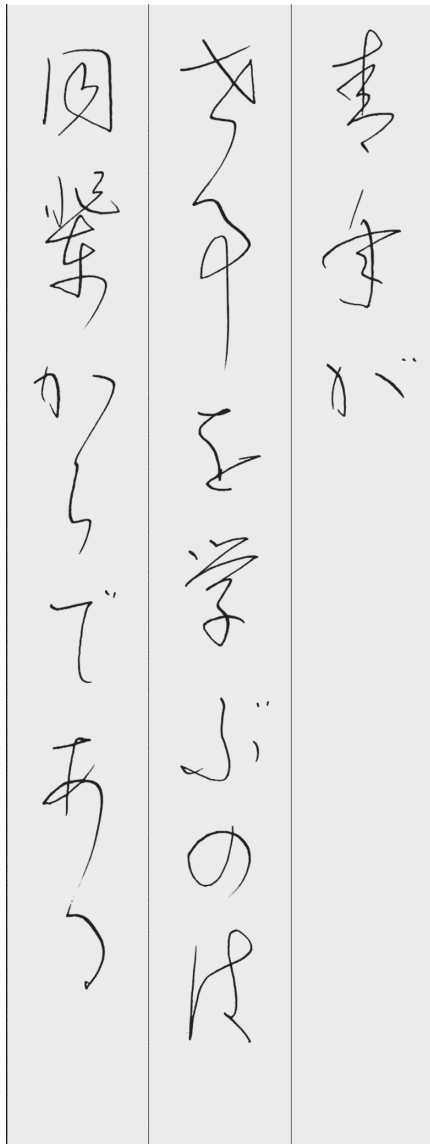
〔解説〕

〔解説〕

〔読み〕 青年が 世事を学ぶのは 同輩からである



▶教範・書範は右課題を「行書」で、師範は「楷書」で出書して下さい。



新井龍峰書

▷用具=自由(黒色に限る)

▷用紙=本会段位用紙

そ	知	そ
の	ら	の
友	ず	人
を	ん	を
見	ば	
よ		

古田瑞苑書

▷用具=自由(黒色に限る)

▷用紙=本会級位用紙

▼教範・書範⇨楷書  
▼師範⇨行草または草書

空腹は  
食物の最良の  
調味料である

◆9月課題予告 (行書)

★青年が… (書体⇨行草または草書)  
ゴルドスミス (一七二八〜一七七四)  
英国の作家であった彼は「青年が世  
事を学ぶのは…」と喝破しています。  
私達がこの世に生まれてからひとり立  
ちの人間になるまで親や先生など年上  
の人々に多く教えられてきました。が、  
世俗のことはむしろ友人や同輩からが  
多いというのです。言われてみれば青  
年時代には友を選ばなければならぬ  
と言われていますが、そのためなの  
でしょう。

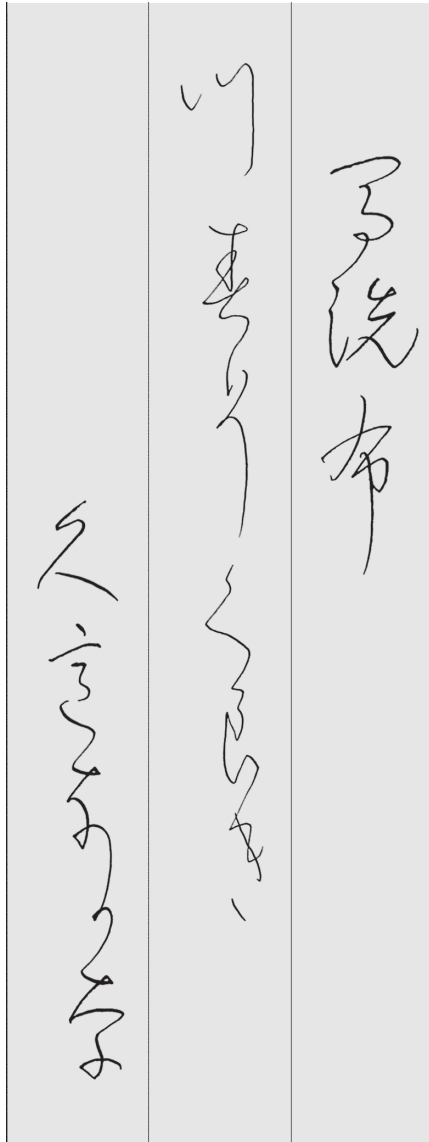
◆9月課題予告 (楷書)  
人間は  
お互いのために  
生まれた者である

★その人を… (書体⇨行書)  
私達は、人と交際する場合にはその  
人の人柄を知る事が大切ですが、一度  
や二度ではなかなかわからないのが普  
通です。その様な時はその人がどの様  
な人とつき合っているかどうかを見る  
と良いといわれます。「その人を知ら  
ずんばその友を視よ。その君を知ら  
ずんばその使う所を視よ。その地を知ら  
ずんばその草木を視よ。」これは孔子家  
語に書かれている一部です。似た者同  
志は自然に集まるものですから、その  
仲間を見ればおおよそわかるというわ  
けです。

準初段から六段まで

新入から1級まで

馬洗<sup>布</sup>う川<sup>春</sup>すそ<sup>曾久良</sup>聞き<sup>久</sup>水<sup>意奈</sup>鶏<sup>可</sup>かな<sup>奈</sup>



た なか き こう 書  
田 中 貴 光

▷用具=自由(黒色に限る)

▷用紙=本会段位用紙

馬洗<sup>あらふ</sup>う川<sup>寸</sup>すそ<sup>曾久羅</sup>聞き<sup>具</sup>水<sup>以</sup>鶏<sup>可</sup>かな<sup>那</sup>



た なか き こう 書  
田 中 貴 光

▷用具=自由(黒色に限る)

▷用紙=本会級位用紙

■両課題とも、文字の変換・配字は自由です。

馬洗<sup>う</sup>ふ川<sup>す</sup>すそ<sup>聞き</sup>聞き<sup>水</sup>水<sup>鶏</sup>鶏<sup>かな</sup>かな

(立花北枝)

〔句解〕一日の仕事を終えて馬を洗う頃、空にはまだ明るさが残るが、川下はもう闇に包まれていて、そこから水鶏のたたく声が聞こえてくる。

〔鑑賞〕〈水鶏かな〉とあるが、水鶏は声を賞するものなので、その声が聞こえてくることをいう。〈聞き〉は〈水鶏〉を直接に修飾するのではなく一種の中止法で、しいて言うなら「聞き(中で鳴く)水鶏」でもある。

〔古筆参考〕

布<sup>ふ</sup> 本<sup>ほん</sup> 多<sup>た</sup> 布<sup>ふ</sup>  
曾<sup>そ</sup> そ<sup>そ</sup> ろ<sup>ろ</sup> ろ<sup>ろ</sup>  
羅<sup>ら</sup> 羅<sup>ら</sup> 羅<sup>ら</sup> 羅<sup>ら</sup>  
具<sup>ぐ</sup> ろ<sup>ろ</sup> ろ<sup>ろ</sup> ろ<sup>ろ</sup>  
意<sup>い</sup> こ<sup>こ</sup> こ<sup>こ</sup> こ<sup>こ</sup>

〔解説〕へろの字は、へろからの流れで書くのですが、突き返して縦長に始筆を書いて下さい。

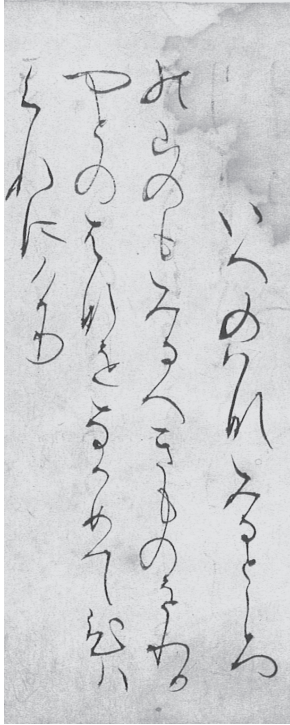
◆9月課題予告

がつくりと抜け初むる齒や秋の風

(杉山杉風)

〔古筆参考〕

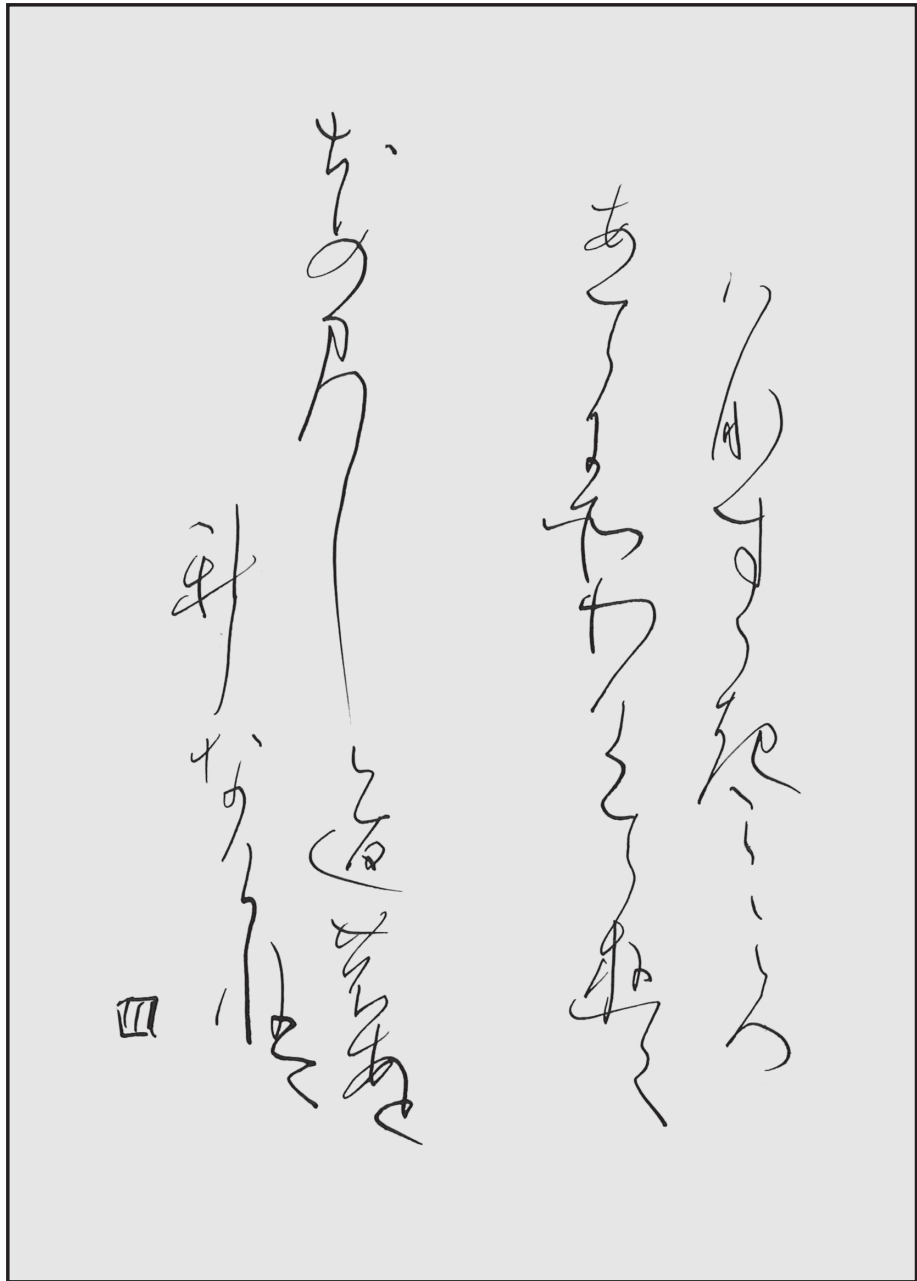
なかつかさしゅう  
中務集



いへのはなハみるところ  
の山能のもみるべきものをわが  
やど者那のはな奈可をながめて飛ハひは  
くれ介利にけり

締切り 八月二十四日(必着)

築瀬舟香書

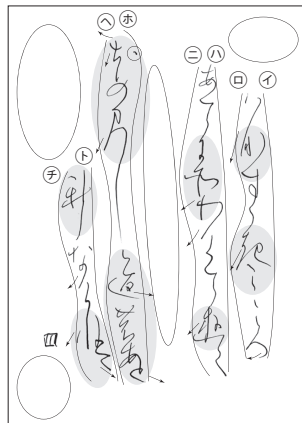


花薄ハ那す、起ころ心あて尔所わ介にぞ分けてゆく  
ほ本の見し道農あと新介盤の跡しなれば

〔歌意〕花薄を分けながら当て推量で進んでゆくよ。かつて通ったことがあってかすかに覚えている道も、生い茂った薄のため跡がわからないので。

〔出典〕新潮日本古典集成

〔解説〕



- ①と②、①と③、④と⑤、①と⑥、①と⑦、①と⑧、①と⑨、①と⑩、①と⑪、①と⑫、①と⑬、①と⑭、①と⑮、①と⑯、①と⑰、①と⑱、①と⑲、①と⑳
- 余白大切。
- 密の動き大切。
- ↙線の方向大切。

◆9月課題予告

虫ハの音ハにかれゆく野辺の草むらにあはれをそへてすめる月かけ

締切り 8月24日(必着)

木陰に入れば、そよぐ風にも秋の  
気配がそこはかとなく感じられる  
季節となりました。今年父の  
十三回忌にあたり、法要を行う  
予定です。ご多忙とは存じますが  
お越しいただきたく、ご案内まで。

作品の出し方

- 新入から師範まで、どなたでも出書できます。成績は評価により毎月変わります。
- 用紙はがき課題はがき用紙、横書き課題は一般部段位用紙を横に使用。
- 用具はがき、横書き課題ともに自由。(黒色に限る)
- 両課題とも、書体変換は自由です。

※手本は水性ボールペン使用

木陰に入れば、そよぐ風にも秋の  
気配がそこはかとなく感じられる  
季節となりました。今年父の  
十三回忌にあたり、法要を行う  
予定です。ご多忙とは存じますが  
お越しいただきたく、ご案内まで。

横 書 き 課 題

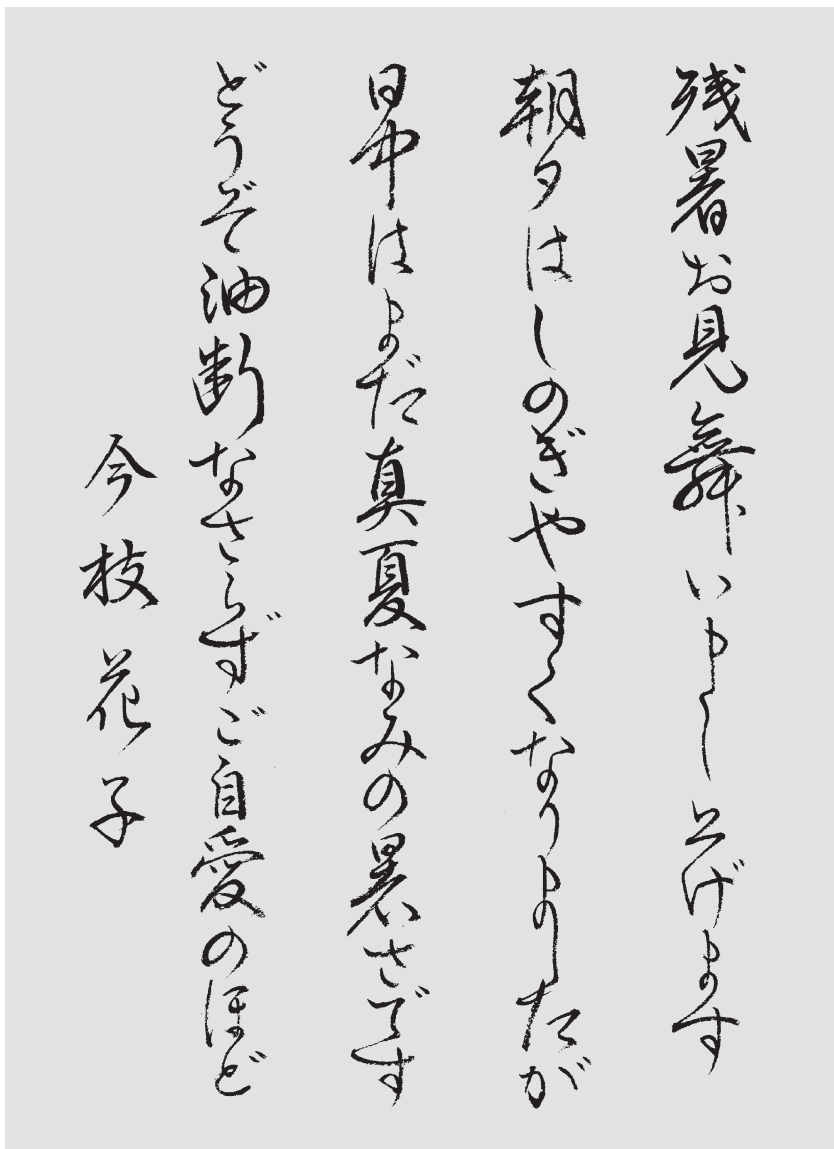
立秋は、陽暦の8月7～8日頃で  
暦の上では残暑の候となります。

佐賀県嬉野市 氏 名

※手本はつけペン使用。 ★三行目は、指定の地名と氏名を書いて下さい。

一般部毛筆細字課題

一般部毛筆条幅課題



半紙 (334 mm × 240 mm)

書 香 梅 藤 伊



松竹水聲涼

締切り 八月二十四日 (必着) 半切 (一三六 cm × 三五 cm)

荻田 蒼仙書

〔大意〕青い松に翠の竹、水声はとりわけ涼感あり。  
初出品の方へ  
支部名・会員番号・  
姓名・毛筆漢字成績  
を、作品左下に必ず  
お書き下さい。

〔条幅解説〕

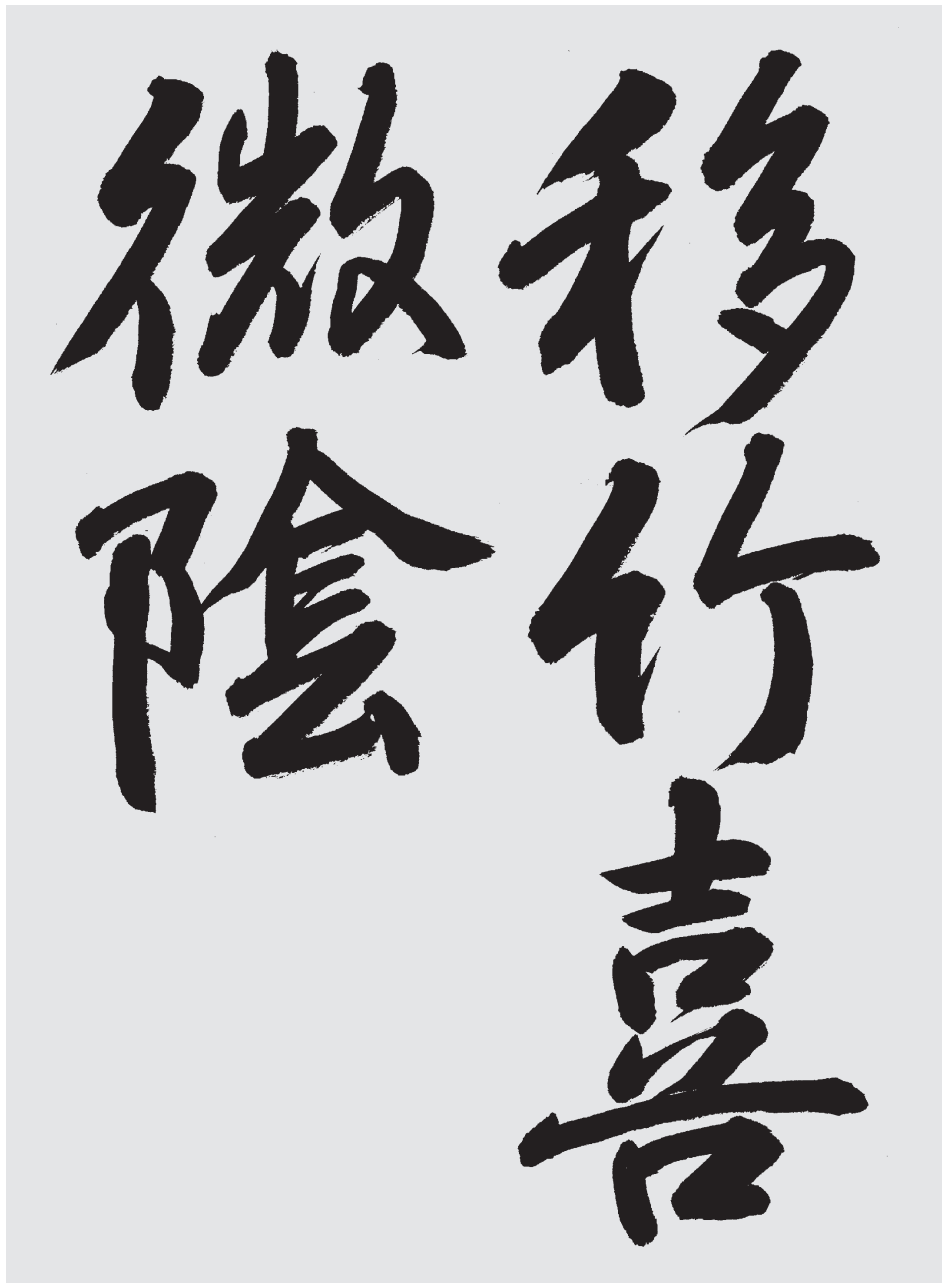
字数が少ないのは容易に書ける反面、大変難しいものです。競う場なら尚更です。□□□□のように同形にしないで、○□△▽のように変化が必要です。墨量、太細等の変化は勿論のこと、異質の一字一字を渾然一体にまとめるのが目標です。

残暑お見舞い申し上げます  
朝夕はしのぎやすくなりましたが  
日はよすが真夏なみの暑さです  
どうぞ油断なさらずご自愛のほど  
(ご自分の氏名)  
・印で墨つきしました。

〔条幅・細字作品の出し方〕

- 新人から師範まで、どなたでも出書できます。
- 成績(天位〜5等)は、評価により毎月かわります。
- 書体変換、変体仮名の交換は自由です。

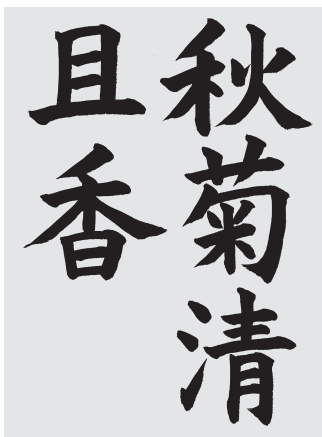
新入から1級まで(行書)



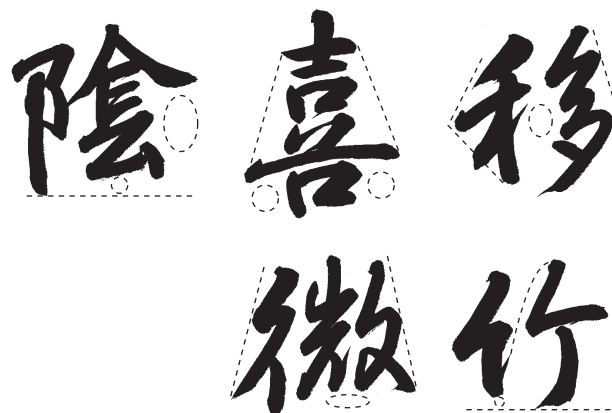
移竹喜微陰

〔大意〕竹をうえて少しの涼しきかげを愛する。

清  
水  
翠  
芳  
書

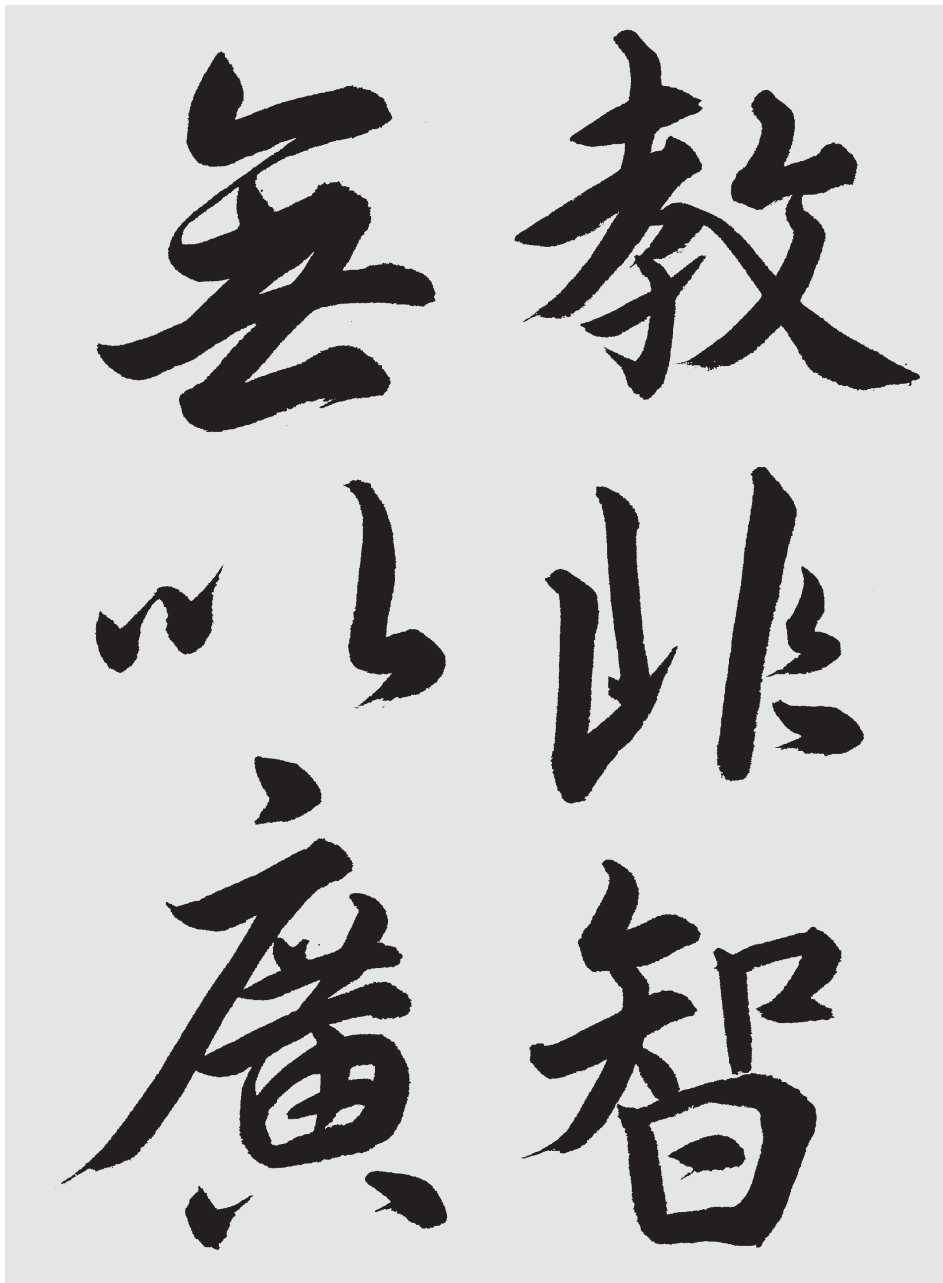


◆9月課題予告(楷書)



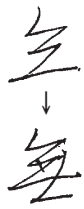
〔解説〕

準初段から師範まで

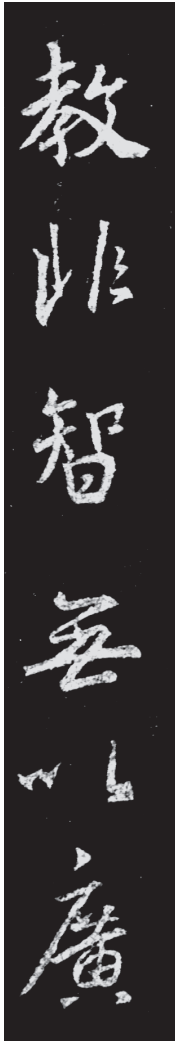


須田一葉臨

[筆順注意]



教 非 智 無 以 廣



〔出典〕 集字聖教序(六七二)

〔筆者〕 王羲之法書より集字

〔読み〕 (正) 教を(顕揚するは、)

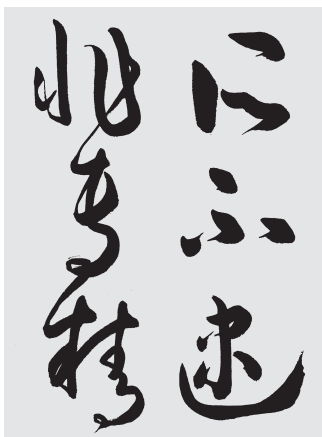
智に非ざれば以て(其の文を) 廣むる無く、

〔解説〕



※文献によって字体が異なる場合があります。

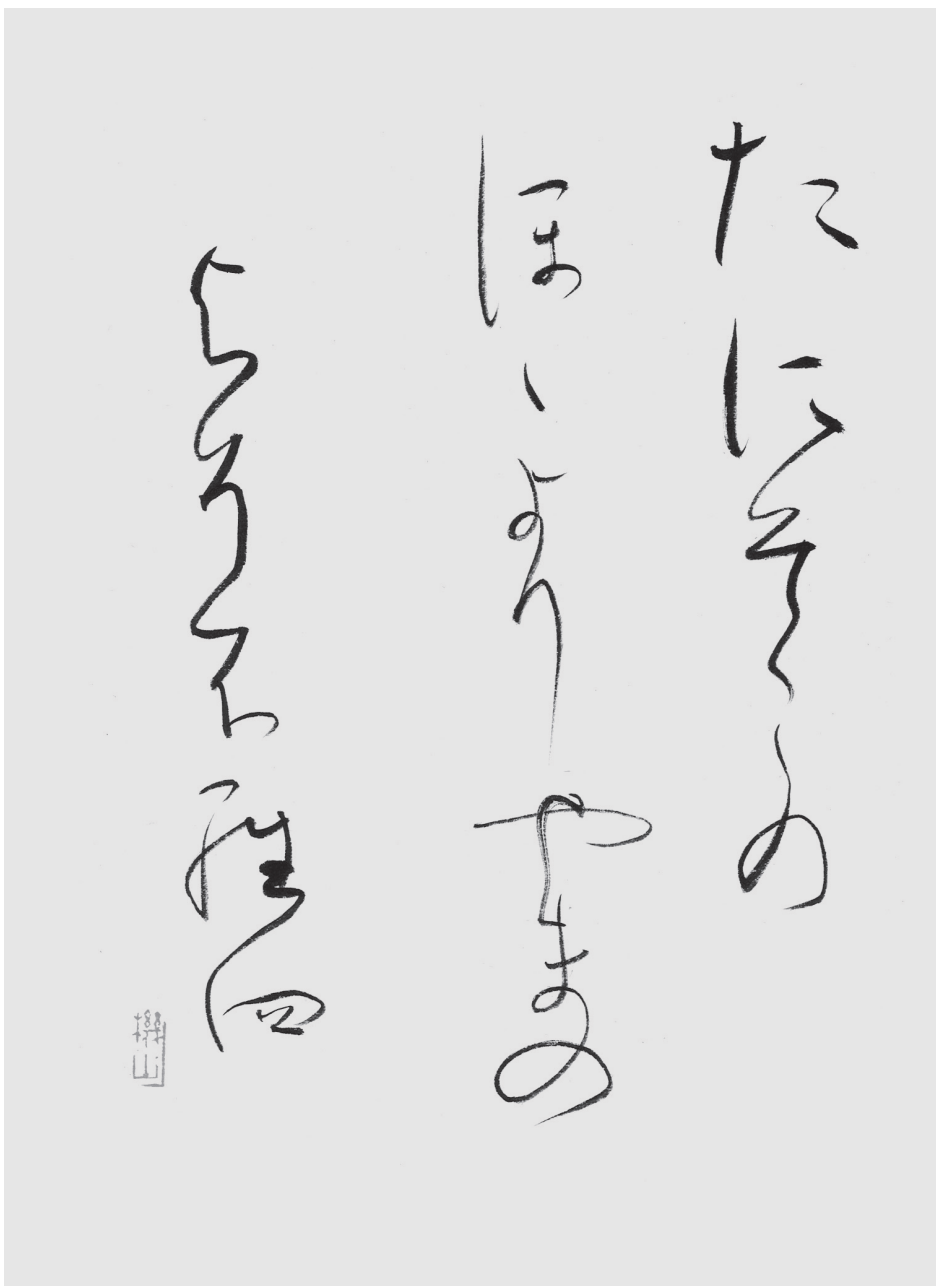
◆9月課題予告





新入から1級まで

浅井機山先生書



谷底の朴より山の粧ふらし

皆吉爽雨

〔句意〕

徐々に進む山の紅葉を詠んだもの。谷底の朴の葉が黄色く色付き始めた。やがてあたりの雑木が紅葉を始め、山の化粧が整うのである。

◆9月課題予告

蔦の葉や残らず動く秋の風

〔解説〕

まず全体を見てみましょう。

上5は、単体、4字連綿。

中7は、単体、単体、2字・3字連綿。

下5は、3字・2字連綿。

〈行間の広狭〉の違いも、捉えて表現してみます。

それでは、1行ずつ見ていきましょう。

「たにその」

「た」

「た」、単体で大切なのは、次の字への連綿がスムーズに行くことです。そのためには、「た」の終画の点と、次の「に」の第1画がリズムよく空中でつながっていることです。〈意連〉とも言います。

「にそのの」、連綿線をよく見て、連綿を上手くするやり方をつかんでください。

「ほ、よりやまの」

「ほ」、第1画は「た」と同じくらいの高さなのに、ちょっと下がって見えるのは第2画を下げて書いているからで、字はヘンとツクリを自由に扱えば、造形的には自分の思うように書けるのです。

「や」、横線が上からの流れをさえぎりましたが、太い線が流れを受け、

「の」、字形をつぶして1行を安定させます。

「与曾不羅四」

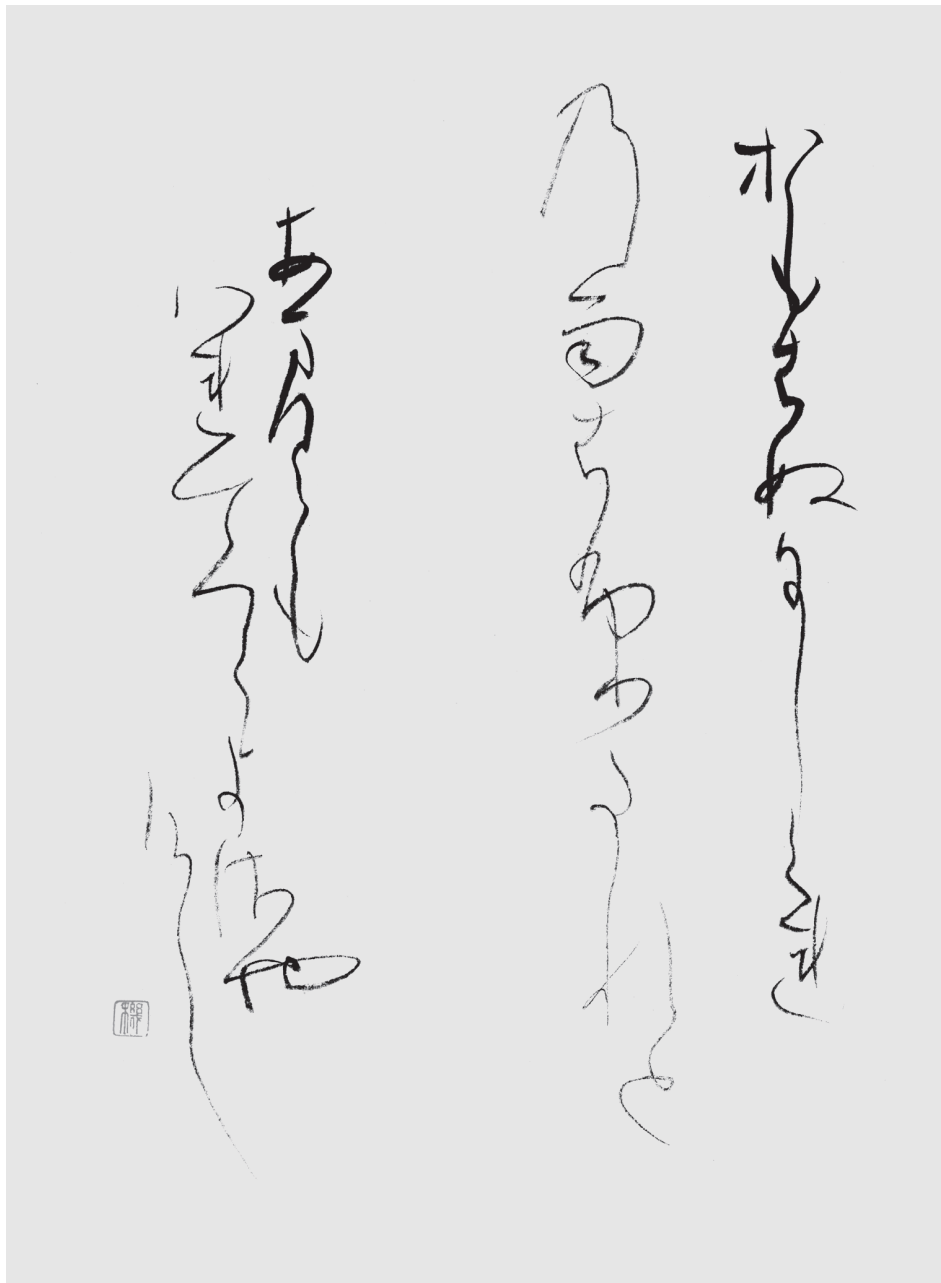
墨継して、

「与曾不」、縦長の字を書き、

「羅四」、横に広げ「た」と対比させます。

準初段から師範まで

浅井機山先生書



於も者  
思はぬに時雨の雨は降りたれど

あ万具も八連  
天雲はれて月夜さやけし

「万葉集10

2227」作者未詳

〔歌意〕

思いもかけず、時雨の雨は降ったけれど、大空の雲は晴れて月がさやかである。

◆9月課題予告

かたはらに秋ぐさの花かたるらく  
ほろびしものはなつかしきかな

〔解説〕

まず全体を見てみましょう。  
墨継ぎは、最初と第3行の頭です。  
前の2行は行間をゆったりとり、後の3行は各行をほぼくっつけています。前後の間の余白は広くゆったりして、どちらからでも寄ってこいという感じ。さて1行ずつ見ていきましょう。

「於も者ぬしく連」

「於も者ぬ」、たっぷり含墨してゆっくり書き出します。基本のリズム〈直線ハヤイ、曲線オソイ、角トメル〉です。「於」の終画は略して「も」に直結します。太い線をグイグイ書いて、「ぬ」の終わりは細くして「尔」以下につなぎます。

「乃雨者布利多れと」

「乃」、大きくゆったり書き出して、「雨」、やや画数が多い所でゆっくり書いて引き締め、以下少しずつ大きく動きながらかすれていきます。

「あ万具も」

墨継ぎし、右の行間をゆったりあけて書き出し、第1行の「於も者ぬ」より下げて〈太細の変化〉をつけて書きます。

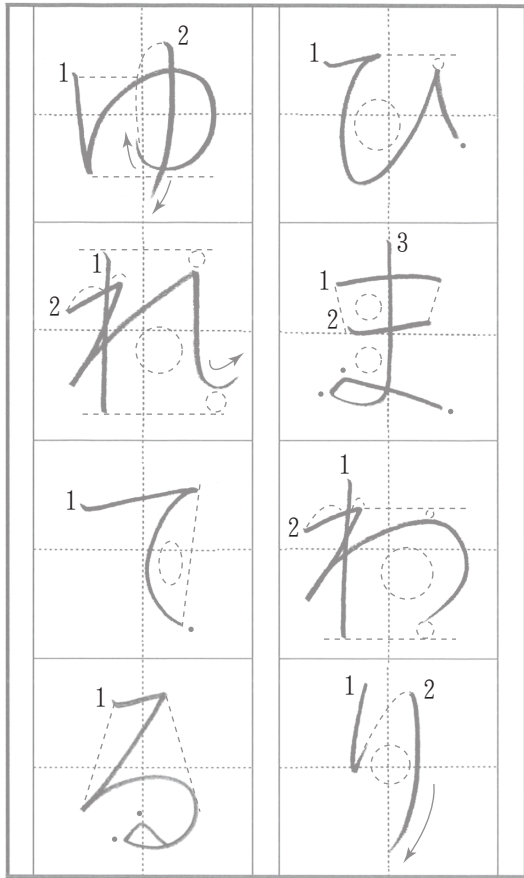
「八連てつくよ佐や」

全部の字が連綿していますが、「くよ」、「よ佐」の連綿線は細いです。「や」は広げて右の余白に大きく働かけます。

「介し」

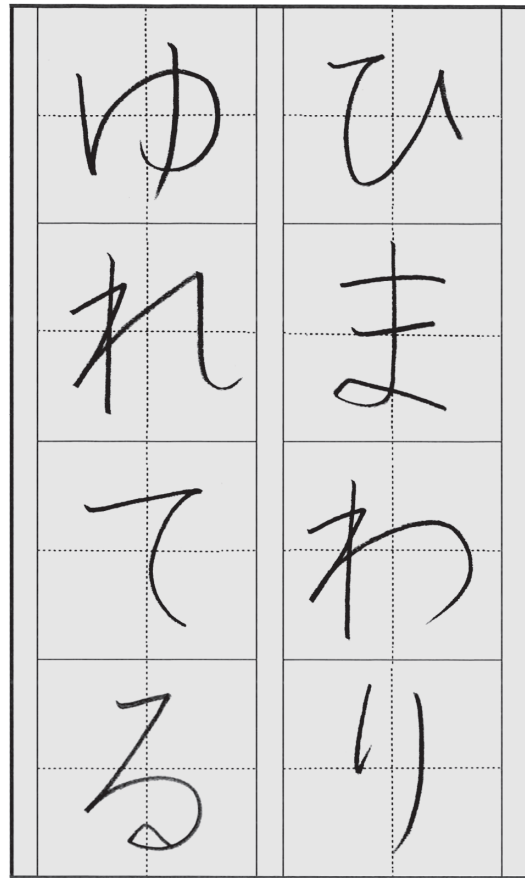
全体を見ながら、のびやかに書いて安定させます。

〈ようぐ〉自由(黒色にかぎる)



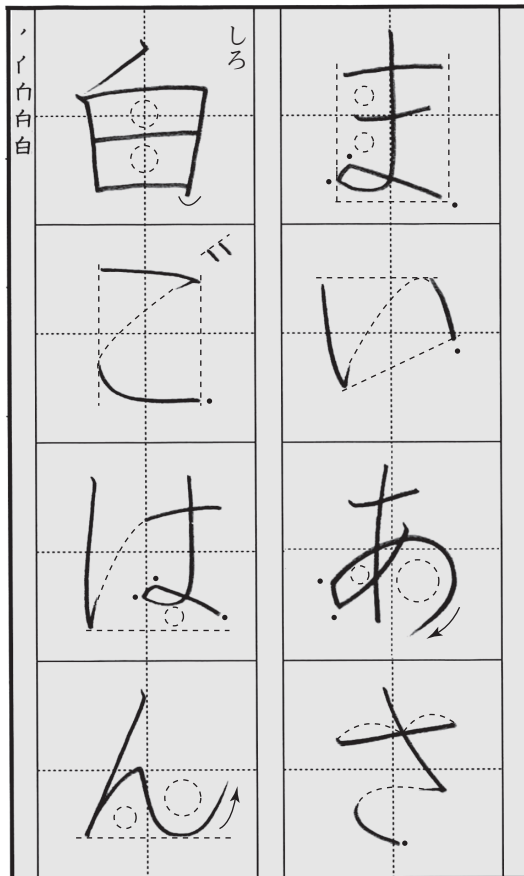
◆ひらがなトレーニング(なぞってかいてみよう)

★新入は、年少・年中・年長の別を記入して下さい。  
★幼年は、全員8マス用紙で出書して下さい。



よ  
う  
年

幼年〜小三年まで  
三宅容玉書



新入〜1級

(注) えんぴつ書きでは、消しゴムを使ってはいけません。



小  
一  
年

準初段以上

〈よううく〉自由(黒色にかぎる)

ナ ナ 中	申	ナ ナ 水	水
	に		そ
キン 金	金		う
ギョ 魚	魚		の

新入〜1級

ひ	に	水
き	金	そ
い	魚	う
ま	が	の
す	五	中

小二年  
準初段以上

カ カ 美	美	ウツク 美	美
	ら		し
ヒロ 拾	拾		い
カイ 貝	貝		貝

新入〜1級

貝	さ	海
が	ん	岸
ら	美	で
拾	し	た
う	い	く

小三年  
準初段以上

(注) えんぴつ書きでは、消しゴムを使ってはいけません。

〈用具〉自由 (黒色に限る)

て	カヨ良良良	良	よ
やま	山	い	
ある	一二天	天	テン
ま	イイ候候候	候	コウ

新入1級

か	足	良
に	取	い
山	り	天
歩	軽	候
き	や	で

小四年

準初段以上

小四年以上  
岡嶋桂川書

雑	十百直直真真	真	ま
海	一丁百夏夏	夏	なつ
水	日甲暑暑暑暑	暑	あつ(さ)
浴	日川混混混混	混	コン

解説 (よく見て習いましょう)

海	で	真
水	混	夏
浴	雑	の
場	す	暑
へ	る	さ

小五年

(全員)

小五以上は、全員15マス用紙で出書して下さい。

用具自由(黒色に限る)

イ 行 林 林 術 術	術	ジュツ	間	間	ま
ロ 品 品 品 品	品	ヒン	近	近	ちか
月 胸 胸 胸 胸	胸	むね	見	見	み(る)
一 せ せ 高 高 高	高	たか(い)	美	美	び

解説(よく見て習いましょう)

が	美	間
高	術	近
鳴	品	で
っ	に	見
た	胸	る

小六年

(全員)

と	に	夏
観	昆	休
察	虫	み
日	採	の
記	集	間

中二・三年

(行書)

接	本	今
近	州	晚
し	に	台
ま	最	風
す	も	が

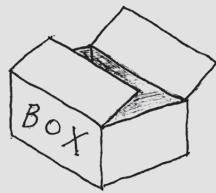
中一年

(行書)

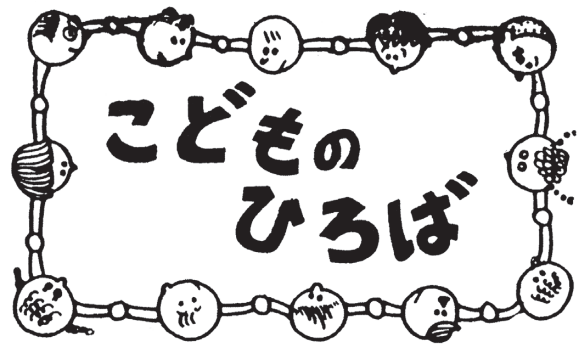
▼小三年以下の課題 まつ 松 うら 浦 しゅう 秋 きん 琴 書

作 <small>つく</small>	箱 <small>はこ</small>	ダ	工 <small>こう</small>	夏 <small>なつ</small>
る	を	ン	作 <small>さく</small>	休 <small>やす</small>
予 <small>よ</small>	使 <small>つか</small>	ボ	は	み
定 <small>てい</small>	い	ー	の	の
		ル		
		の		

◎お手本はえんぴつ使用



- ◇作品の出し方
- 一、選定用紙（五行・四行）に書いて下さい。
  - 一、作品には、支部名（校名）学年、氏名を書き入れて下さい。
  - 一、筆記用具は自由です。（黒色に限る）
  - 一、四行用紙を使用してもよろしい。その場合は、文章を適当に短くして下さい。
  - 一、成績は評価により毎月変わります。
  - 一、支部会員は、出品ラベルを必ず貼って下さい。貼っていない方は新入とみなします。



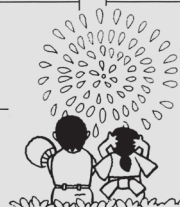
しめきり 8月24日（必着）

習っていない漢字は  
ひらがなで書いてもよろしい。

▼小四年以上の課題 やす 保 だ 田 すい 翠 えん 苑 書

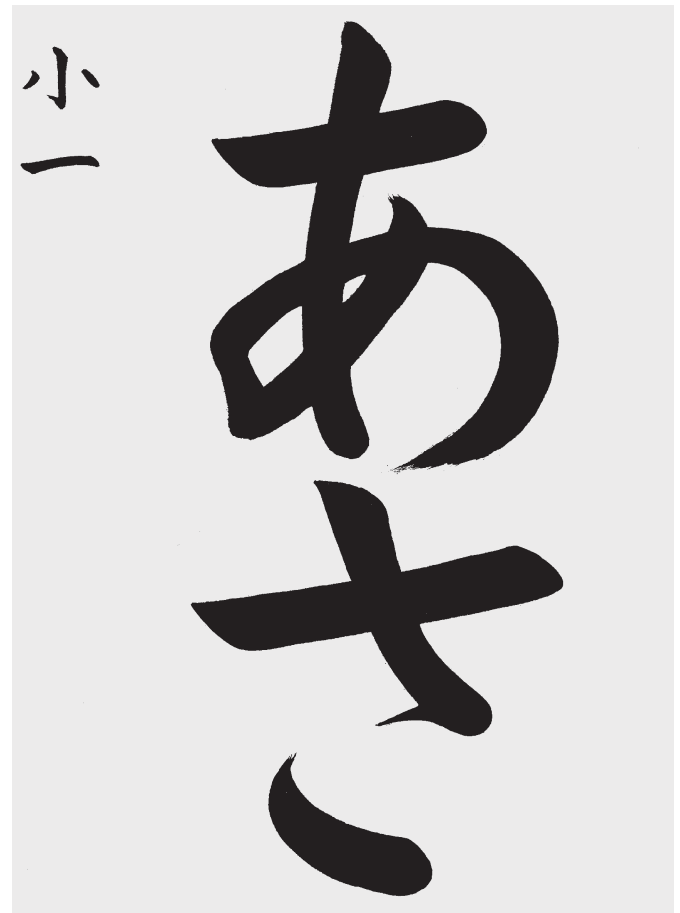
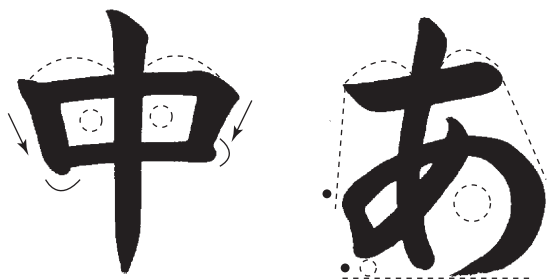
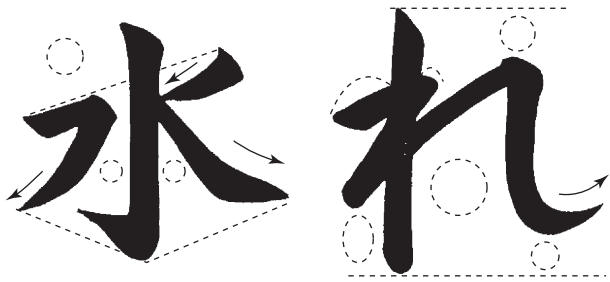
見 <small>み</small>	一 <small>いち</small>	丘 <small>おか</small>	花 <small>はな</small>	町 <small>ちやう</small>
渡 <small>わた</small>	望 <small>ぼう</small>	の	火 <small>び</small>	内 <small>ない</small>
せ	し	上 <small>うえ</small>	大 <small>たい</small>	の
る	て	か	会 <small>かい</small>	
		ら	は	

◎お手本はつけペン使用

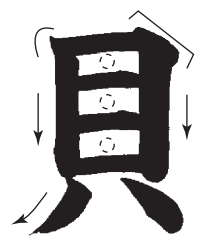
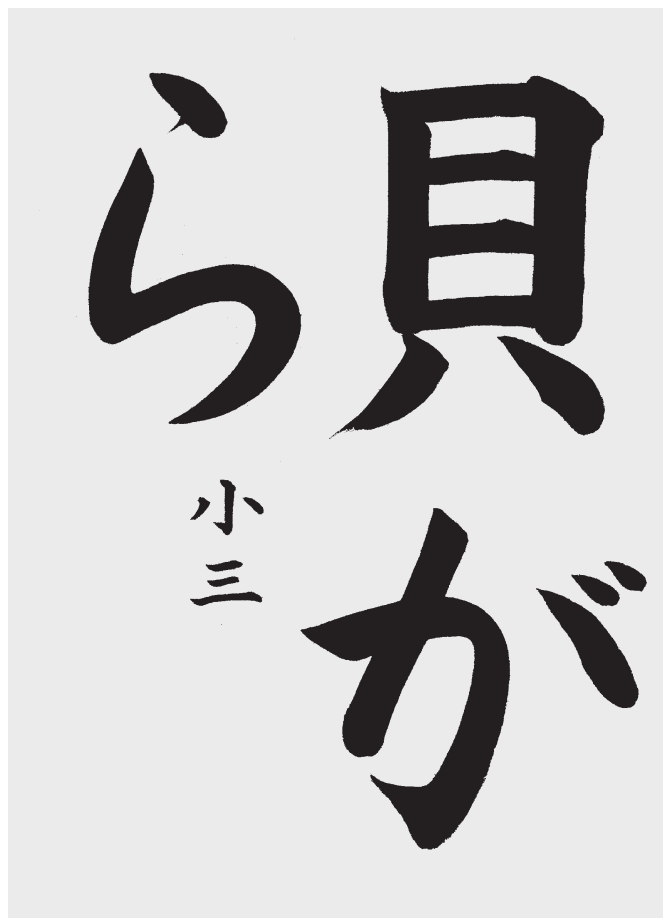
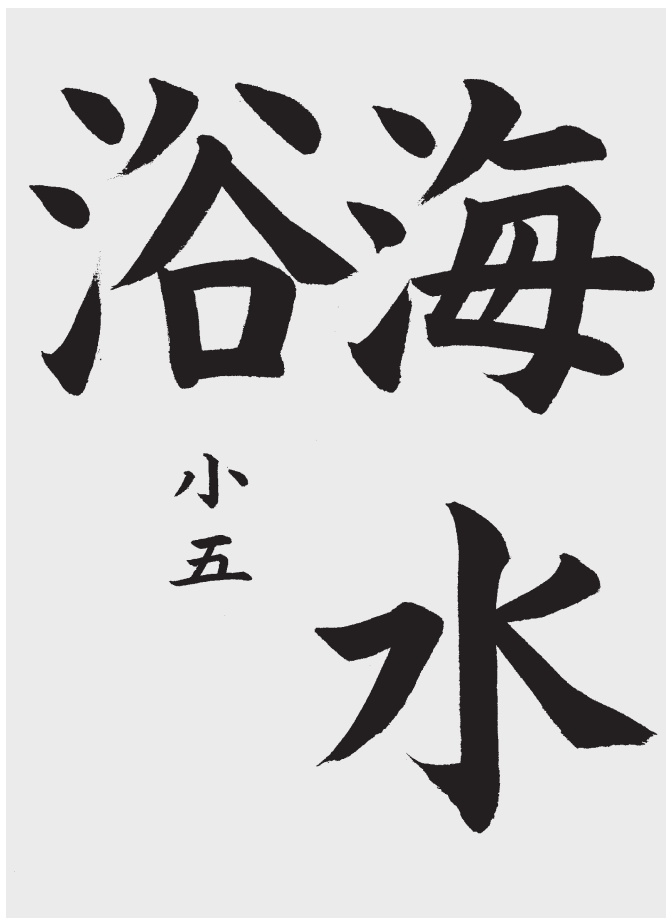




幼年〜小二年  
酒井智仔書







小三〜小五年

水野碧友書

中二・三  
採昆 集虫

小六〜中二・三年

玉樹小華書

品美 術

小六

近 美 品 風  
昆 集

※行書では画のつながりに注意しよう。

中一  
接台 近風